

鹽  
尻  
四  
扁  
三



5  
508  
46





15  
508  
46

寺の之理面をいふ

○長尾為磨といふ志士あり、豊田の祠友なりし  
然して惟是の人とあり、所居妖鬼の事とありて  
悪僧を欺き自徳と号して早紀と号して一箇  
の門と立てて人の累致を憐れなりしれども此  
身子つらと云ふ事神系をあらわし小兒屋舎より  
惟と為磨といはれし神なり是實に忌妬の事あり  
のふして云ふは又佛者師弟無縁におほり  
かゝり其神なり始て十八神道渡テ如持  
等なる密家の精粕と秘と一擲し一箇の灵  
謁盗合の擲人なるもの  
○或密家の傳曰長尾志士と云ふ事一書に記す







大宮聖真子十禪師宗廟神二宮社神其他社金子客入禪神也  
信景田十禪師号木僧宮也然以十方衆生法喜禪悅食  
之語而附合之或以大孫受十代之禪而牽合日吉鎮座  
記隨之共忘其故為註誤者也

山王七重習

- 一 垂迹山王
- 二 木地山王
- 三 觀心山王
- 四 無作山王
- 五 三密山王
- 六 老初不知山王
- 七 如影隨形山王畧其記

是等皆以法華之旨所建

大宮不入僧形

按是如准伊勢所為次

天照太神者自惟法身素盞鳥尊者無明鍊塲者法界塲  
婆也岡岩戶者無明法義也大刀二神者定惠二法也度火  
者諸方便教也

按卜部氏等以大神隱密者為理詭曰我心原明也以邪  
念愒北之者素盞鳥尊為惡日神入窟也諸神集會設燎  
奏樂者復明之工夫乎口雄岡岩戶者以勇去闇也六合  
一時明也者用邪念而復明理本原意也等云是倣  
浮屠之說變詞者而不知紀木義可示歎哉

山王使者云花嚴曰神猴狨王又云山母山神王云山王  
秘決云無動寺智信說山王者釋尊應迹以申為卒迹天神無氏  
示申為神地祇有氏示氏為祇云



按使者淳屠之說也秘決解神字亦附會申屈伸之申  
而不大歲所舍名淳屠多以私意解文字故此集第  
一山玉字義謂賢橫一三点者牽合不縱不橫非三之  
觀法為權現托宣

熱田明神云蓬萊宮者熱田社是也揚貴妃者今熱田明神  
是也此社祿有五輪捨波女銘釋迦種子故字此捨婆揚貴妃  
墳墓也

此說至拙哉然至近世彼捨石殘社後是依淳屠之說所  
建也

熱田明神者金剛界大日也故以五智習本地或以真言  
三部經為本地以宝劔為神体皆是金剛界知門表示也

是以藏劔習合宮說者也

蓬萊宮者不壞金剛智休也法華宗意本地三身指久遠  
壽量習不老不死

是以有蓬萊之妄說又仍所附會者也

熊野權現云熊野胎藏權現金峯金剛權現等

密家以我神祠禿兩部以習合其後男女交合亦習  
合兩部姿不律是立川邪義所起也

熊野參詣路次道言男サント名女イタト名ケ尻ヲハヒ

ワフキト名ケ法師ヲハツリト名ク

是效伊勢存宮忌詞所設夫熊野專為佛事何  
用僧尼忌詞意將准神宮所造者歟



天照太神每日法樂如何答山家大師每神法明法樂法  
云常在靈鷲山及餘諸住所我此土安穩大人常充滿云  
嗚呼浮屠執所習拾我國故以胡書 詞祭神尽為  
胡畧辨之授我素雖不足勞遠牙以古書人誤信之  
故畧辨之授我童蒙於山王之辨有林氏山王論讀  
之宜知其說矣

○正公太神宮御參詣 万治二年己亥三月九日  
御出船十五日御歸府

前權大納言光貞御參詣延寶五年

○按神宮雜事記景行天皇廿八年九月五百野皇女イフノノヒメ供奉始也  
天武天皇白鳳四年九月多基子內親王御杖代之始也是  
依大友皇子之亡勅賽之典也先親錄多基子之上錄內親

王雖書宣下而不見正史欵

○和州三瀨山の因法花法ありとて也花法ありの常と  
應と穰神事あり代法ありの應也代法あり

○大德有祢宣大夫稱按是祠官拜五位者欵後世社神  
人自称某大夫代々呼同稱者近世僭上而若俗稱某  
左衛其兵衛等欵習俗不可變可歎哉

○卜部兼俱明應三年十月の中臣板聽書一卷と按  
祇園の年以天皇清和天皇貞觀天下疫癘流行  
す兼俱二十代乃有日良磨勅とて京中乃  
男女を牽ひ六月七日と高神樂と物神樂  
苑一殿と道りと一殿と道りと一殿と道り







答以偈曰平生只解画弥陀不解參禪可奈何幸有五湖  
凡月在太平何用動干戈

承承後棄坊重源自号南無阿弥陀佛由是後人  
有以其河弥為名者蓋似恩淨之号歟

○南山雲引北山雲歸去未字一三三四五六七八九朵

南嶽芭蕉庵主泉大道歌頌也山崎敬義十團子

詩蓋本之歟

○人ともいふととくさるるもくしん釈迦譜と宗仰  
とくけり物は佛者の名目なるも

○破邪論云吳主按三寶歸吳曰礼丘老子得与佛比對以吾

闕澤曰遠則遠矣所以然者孔老設教法天制用不敢

違諸佛設教天法奉行不敢違佛以此言之實對明矣

大藏一覽一

信景曰嗚呼淳屠以此等妄言誣人乎夫天者理而已豈

汝所謂若帝釋者執蓋梵王者持拂佛之左右侍立

釋迦譜或天帝者拜佛足聞說法法華帝釋者至瞿

曇之死奉其骨涅槃現形奉仕者使天吐大言欺人欺

人者乃是欺天也瞿曇生天地間死天地間是亦人也而

可欺天子噫知聖神天地万物位育德化則何造謾言

為名教罪人乎彼欲立一家門戶劫欺天人入異端

會豈城甚可哀哉其孫權見沙門之說於正火無據是

亦彼家偽設歟於孔呼名於老稱子是淳屠氏之意也







○ 内宮の号も新氏より呼ぶるをていふあり  
旧事記に卯妻の号ありはこれに對して内宮  
と呼ぶなり

○ 雜心論曰有舍利名塔無舍利名支提支提六胡諧譯可供  
養處一譯滅惡生善處

○ 淳屠氏八神見舍利子問經

天神 虚空龍神 夜叉神 乾闥婆神 阿修羅神  
迦婁羅神 緊那羅神 摩唯羅神

按秦代祭八神道家傳之尊崇焉故淳屠依之異名  
而自家亦祭八神歟

○ 四時調棋牋云唐觀燈士人作踏歌唱之歌曰長安少女

踏春陽ヲ云々

按古今事考ありて唐の代の踏歌と云ふは百より  
十七より多きは元の花打と云ふなり 起承  
轉合の各ありしと云ふしなりは流れて遊  
戯とありし我玉歌延踏歌の長を云ふは百  
の花より春陽と踏といふは踏歌  
といふとありきと云ふも和訓するに  
たりはるらん  
踏歌と云ふは百年ありきと云ふは後百  
ありきと云ふは起承と云ふは下ありきと云ふは  
ありきと云ふは起承なり



○牛頭天王祠三所第一牛頭天王第二左八王子第三右波利委  
諸列天學如斯尾張國津嶋右八王子左一王子山城國山崎天王兩  
座左東天王八王子右天神八王子是異京師祇園祠歟

按尾州津島天王欽明天皇元年降江州栗太郡繼材天王文武  
天皇天寶年中降同郡下笠天王同御宇慶雲元年三月習影向播州  
廣峯天王元正天皇養老元年現基皆社家私記也夫牛頭天王  
脩法親氏之所行也然文武前後盛附祀者歟津島社記嵯峨天皇  
建祠可也欽明元年之說妄欽然帝紀及令或祀疫神者不謂  
牛頭天王中古親氏攘疫亦修古祥天女悔過法等而未聞用天刑  
星儀軌清和天皇御宇宗牛頭天王於祇園寺是蓋京師牛頭天王  
修法之始欽依修後風土記之說以為速進雄神若金毘羅摩多

羅及赤山新羅等神亦為素蓋鳥尊

○京師系極のふ今如川のふと舟神と祠ありとこれと  
初雲路幸神と云極田考考神ありと延暦年中新祀と  
しり此化又思ふと古くは同ありと予曰愛宕のふ代  
邑名ありと古く系極ふ出雲等と下町を考るとして  
あり舟の神と按雲路化と舟花代の時始て信  
考を考るとして記せば後世の信託にても極武此時  
ありとていふ所ありと或は前編の如きを舟 旅舟社と  
舟の神と記し信考と云ふ考を考れありとて天慶二年  
の舟の神と考を考るとも後世の舟の神と考と記して  
信考考の大體といふと所考の信考あり今考り







經而不史則為說曰話矣何以彰事實乎

富莫富於常 知定貴莫貴於能脫俗 貧莫貧於無見識 賤莫賤於無骨力 身無一賢曰窮 明未四方達百歲榮華曰天萬也  
永賴曰壽

○三川大演七俗の記曰 弘平三年 親氏 弘平 弟 正

弘平 弟 正

○無量壽經卷二 曹魏の傍原僧鎧胡譯せり 下巻造惡の事と

流子父子兄弟室家夫婦都無義理不順法度相欺惑佞諂不思

巧言諛媚嫉賢諛善主上不明任用臣下臣下自在機偽多端等

以るは當時魏の世の事と云ふは似たり 相佛の國と云

是長の記 我と云ふは弘平の世の事と云ふは似たり 又云佛不遊

履國邑丘 聖靡不蒙化 天下和順 日月清明 風雨以時 災疔不起 國豐民安 兵戈無用 宗德興仁 務修禮讓 聖人過化存神 天地之儀 仰之如金 佛流之似之也

○三川猿投山神宮寺德川家御位牌

親氏公 康安元年辛酉月廿日卒去

泰親公 永和三年己巳九月廿日卒去

右年号可疑 康安元年ハ尊氏薨後四年なり 永和七

義満の代なり

家忠日記増補追加發題曰 親氏 康正二年四月廿日卒

泰親 至八其年九月三日卒 是實錄なり

信光公 長亨二年七月二十七日卒去







殿西宮東氏人布着之已刻先氏人物惣官在廳神宮等於下字  
殿也着座各有坐次權少祝酒面々前杯入之後祝言祐宣申  
之次酒一献後賦管取割天次差返次立座列立下客殿東午水  
進之自惣官冠木綿氏人至氏次參御前氏因口御宿殿頓宮西方假  
屋賦管信膳面々取之取割天返云々

○長門大目氏ハ北辰尊星供と家よ侍ハ与列河井氏一と  
八大龍神候と修せし高時氏家ハ隆祀由りし  
○藝後團司北昌居城ハ志那多氣名甚後多氣郡田  
在、市不修多氣大河内市不日取城内市不とて將  
令して監せしむ是を為司の三大神といひし又  
于後ハ志那波用市不日取是河内市不孫方市不云々

云官と立し二家と稱せし是と儀あり云々  
天正十八年八月朔日大神元卒共入市武州赤松郡戸  
城信濃これと  
雲赤松と云々

江戸の藩と云々年中上杉右京亮憲忠の長長太田  
持賢入道乃權築神也云々天正のころハ志那山左の儀  
系故系城なりし系故系藩氏ハ屬し相承山田原  
と云るなり身川村岩初古捕とて江戸の城と云々  
志と神君と云し志と改て稱り入る也云々  
天正十一年新より大藩と築江殿岡と化せ云々  
實より万世の信基と云々







鳴呼航不航何と大神目これと謂ひん也甚哉浮屠誣神欺人

○三寶菩薩神 素盞鳥尊 武素盞鳥尊 速素盞鳥尊

ト氏、許舎氏之宗荒神ハ浮屠ノ私享密教ヲ流

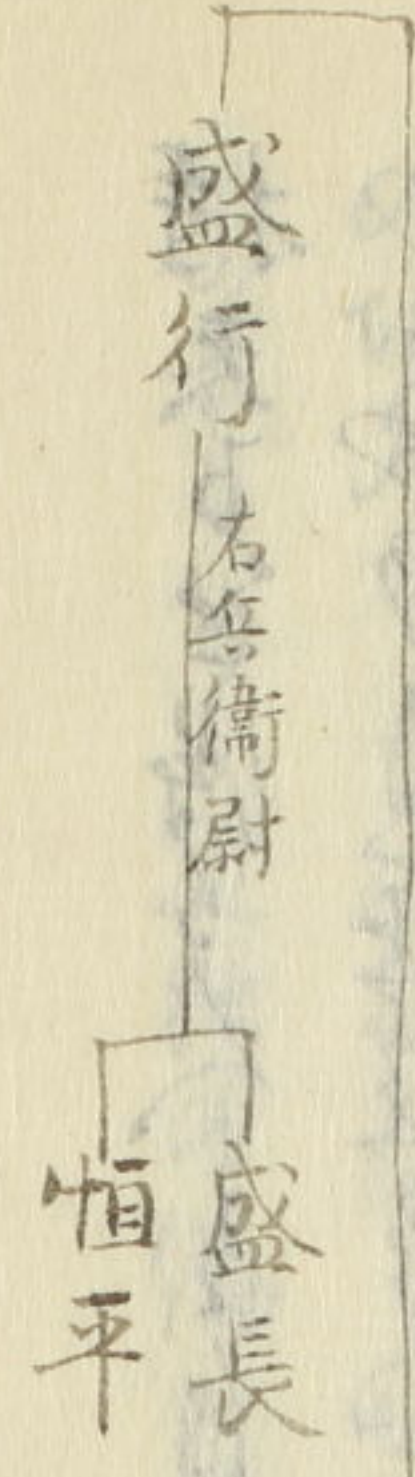
これと北ノ守谷等集々トん也抑ヤト氏

○直滿 井伊信濃守 直親 肥後守 直政 吾部女輔

為るもの此ノ一井伊谷ノ裔孫也

○伊勢氏北條先祖

正度 平姓從四位下 越前守 秀衡 右京亮 盛光 右京亮



恒平三代伊勢守俊繼始号伊勢氏

裔伊勢備中守貞藤子伊勢親九郎長氏

一説

鎮守府將軍平維衡裔伊勢守氏貞之孫駿河守照康二男新九郎長氏

一説

小松資盛裔伊勢肥前守盛經末孫伊勢親九郎盛時後改北條新九郎長氏

或春ノハ伊勢親九郎ハ山城守ノ孫ノ人又ハ大和守ト云  
ハ春ノハ伊勢親九郎ハ山城守ノ孫ノ人又ハ大和守ト云  
ハ春ノハ伊勢親九郎ハ山城守ノ孫ノ人又ハ大和守ト云



○ 納殿 元治初年ありし一平細く書今の儀あり

○ 妙光院住持忠祐慶大姉 忠祐之弟信康中女 寛永三年有北

○ 吾道

○ 尾府城東照宮元和五年九月十七日迁宮

南光坊天海 謚慈眼大師

奉行 成瀬隼人正藤原正成 竹腰山城守藤原正次

大工 澤田若狭守藤原吉次

神衣 行事官調進 御太刀三柄 宗近 正恒 國行

甲冑弓箭等御奉納

寛永四年号佛院称天長山神宮寺尊珠院天海執之

開基慈眼大師 二代珍祐権僧正 上乘院自山門 日藏院末任

三代大僧都珍海 淨代院 四代珍舜僧正觀心院

五代靈胤僧正 城南院 六代智洞大僧都 惠恩院

正五位下宮内大輔源幸勝

神主 正四位下民部大輔源恒幸

從五位下刑部太輔源幸和

祭禮

元和六年四月十七日始

○ 相効藤沢清浄光寺遊り上人迫國の時云方乃集幸  
と許し人夫傳ると好むのまゝにありしを徳川家  
が先程礼と辟け時流とせり也今の後天下一統  
まゝに傳傳の為よのありと云事謂く少少



是利家の所より少部をとりしれ也由せしり  
永正十年四月十日の少部を著度内少代細川右兵衛  
持之執事の例とあれは前々夫駐在正とて道中せ下  
まゝなり永正の右京を交り其執事なり永享八年  
三月五日の少部を著度内少部を著度内少部を著度内  
少部を著度内少部を著度内少部を著度内少部を著度内  
少部を著度内少部を著度内少部を著度内少部を著度内  
少部を著度内少部を著度内少部を著度内少部を著度内

○義満將軍大上天皇の尊号ハ應永十五年五月九日也昌山基  
國細川頼元諫議して辞せしむ吹毛居士に記し見む居士  
姓多々良氏ハ瀧川元和中人

○江談抄 中抄二

賀茂祭教免著綾羅錦綉服為檢非違使共人何故戸部答  
云非人之故不憚忌也公任卿云然者雖致放火殺害不可加禁過  
於他罪科者皆加刑罪於著賞服條者指證文歟

信景按すくく今世に社祭に非ず井の凡下  
美服を著借上を實に此れとすくく江流舟信の  
辨あれは此れハ意なり公任の倫とすくく

大内門額南面者弘法大師 東西者嵯峨帝北面者攝逸執事  
大極殿額者敏行中將手跡也  
延喜之北上達部時服不好羨鹿朱雀院御時或公卿遣消息  
於内裏<sup>能長</sup>房許令奏曰先朝恩賜御製年月推物所破損  
御下襲<sup>能長</sup>領可被申下者大畧調束帶一具西三年之間節會







蜘蛛長脚とありと見て誤る者多し無人を入則結網當  
 之といふ詩の幽風蟪蛄在戸といふことなり多したこも  
 なるよるくちりもまたことばは蟹田の蟹人あらたこといふ  
 めるふ類よ、蟹人の老あり又海老もまたことばで小  
 きと海老たこもいふ又鳥賊ハ甲虫の類もてたこもい  
 けりゆゑ或人云いふは実よ甲ある首のお入らるる亀  
 よも一甲印門ある蟹龍れやうなる各似魚のそりり  
 色もたつ足をたふし口の例もあつたなり甲れそり  
 足なりといふり予海老もて板のいふことえはつらなり  
 よテ海老もて甲もてさう葉條のことも又蟹田の蟹人  
 はんといふといふ甲のあま年のやき肉海老もあつた

蟹の類は是の如くこれハ八足かふひれなりやうもあつた  
 けよるゆれば一程のたね糸の形ありやうの骨あり  
 形のちとほし一程其一程のよる物を分ては  
 めりつとあつた海老もてさうなり



○ 松下園翠軒評本のた実と記し系名を集りて一  
 四方の書法ゆきなりてそり人名同也一系名あるは位牌  
 よ櫓淵を兵衛尉政善といふ名あり位牌の曰これなり







○ 隋煬帝為晉王之時受戒天台智者大師法諱号總持三  
 王者の傳はるる夫煬帝ハ樂射しももつる者也王之法  
 主の母父王の妃を犯しやして父を殺し位を淪る民とる  
 一や海を監行しやして北交のこもつりて父  
 戒何の益あり鳴呼浮屠のあまや益をいふや大害  
 あるやとてしよふれはるあまやとて法和天皇を位  
 の同多えよ受戒めり法諱と云真と稱せ煬帝  
 の例とるやよめぬあまやとて佛を何のあ創と  
 して帝の受戒ありこも例ももつてかや法す  
 事と川るやとて法就唐日在位の帝は号とつる  
 うあまよの法はあまやと強きハむの法なり

まよりや年法はゆ受戒のりや一仙志は出無不義の  
 人も我よりあま法法とてやこれ終者なり若  
 人も有りとのこる所戸ハとと執す神子ありても  
 法法豐虎の祀し作を聖武の國と考謙の儒礼記  
 山の愚弱なる類もあるハ法正なりとて二十二年  
 法法の始とて法菩薩の化現なりといふなり  
 あまや

○ 元弘三年<sup>五月</sup>近江国馬場宿米山の麓一向寺にて戦死自  
 殺の士四百余人之中百八十九人姓名法号馬場八葉山  
 蓮花寺のこま帳に記す  
 河上もあまやとて思ふるや法なりとて記す麻也とてなり







○尾張國愛智山田兩郡司兼社大祓宣尾張忠命此乃史ノ文字温威

三月廿日宣旨以同廿八日到來稱以去白鳳九年十一月一日被稱

熱田大明神按廿年可作十一年愛智郡衛崎エサキマツコ松炬島機綾村衛崎又作會崎

契田大明神アタタリマス大神者去大化二年ア未歲三年可作三年五月一日天下御坐

此土天下奉理行向草木自莫不燒枯者号遊行雉草大

明神云雉可作雞即隨身源佐尾名神所化者也郡司尾張忠命治頭伊勢尾張稻

種御子并根預子孫西海部彦谷元長祝部宮九等号根本

當國尾張氏立六郡從獻公家普一宗令勒執印自尔降住數代

十勒度裕住疑終字欣々字下就中遠祖磨種大隅兄弟三人建國肇郡獻賦

貢稅云宮所定四百八町内按是大化三年五月号契田大明神云天照

五鏡日本第三之賢所者神是我也者ノ字神ノ字ノ下アルニ

奥書云

右件官符朱鳥元年六月十五日庚寅日宣時到未奉安

神興於御宝殿至于正天者奉蓋置御内院於案文者

官幣使等租録載大神昔御托宣者羊アツクリマス天下御本未為

將來後世奉書傳身敢不可及國努力云矣

長寛二年八月九日

右丹波尾張宿禰仲野の事殿即誓田中紀とハル也

今も肉と抄し遺忘は傳ふ波平宅実又古也

の直筆ひらひら物より去の申一信の神詣朱鳥元年

奉進の事見ゆ又奉誓傳等の如く源平共官攝あり

朱鳥の事此也又中納言宰相号号天武の



所の祓禊... 疑... 後... の... と... 幸... たり

○ 問長寛勘文何乎曰二條院長寛年中紀伊国司甲斐守藤原忠重令目代右馬允中原清弘在廳官人三枝守政等恣停廢熊野八代庄拔棄廟宇奪取年貢或追補在家擱取神人或禁其身割其口事狼藉甚矣罪狀推究之律盜大社神物者為八虐一條罰已決焉時 天皇命諸家曰大社者伊勢大神宮餘憲稱小社今以熊野可准伊勢否宣勘定之於是合奉勘文即輯録之名曰長寛勘文所謂勘文論伊勢与熊野之神威優劣如何云

大内人子村弘正承應二仲夏所述長寛勘文或問右勘文

の中若一王子神未詳一曰天照國照彦火明櫛玉速日尊大道日女命之妃之して天香語山命と生しり天降降しし午粟彦命と名つゝ又云念下命と云天降まじりしに伊弉諾也也等と天照大神此等孫りぬは君一王子と稱すりしにり按すりしに念下命ハ神代卷のけふあつたゆと名若女一五子と稱すりし天照大神のつとぬと能死の禰友陸しし武同よはる按すりしと記せり

○ 大嘗 禮記祭統曰外祭則郊社是也内祭則大嘗禘是也我國大嘗會本之者也

○ 或國の守飢餓の丐者と云りし其り粥と考て施しん

此を呪ふ義程ありてぬハ死あり更之れとん



下曰のき裸行草食日久〜〜〜俄は温體と合ハ  
中くはさるれ自死し方々〜〜〜て折捨るり〜〜の  
を免しとすて曰痛ハ凡と重の世國と治ハ人貪婪〜〜  
剥脂雅髓の好吏と〜〜〜年利の政と〜〜〜惨刻督促は  
波石砂と遊々流離願序の極〜〜〜怪怖〜〜  
罪番又安〜逆は控預又面と作〜人の殘虐と〜ハハ  
或と希身其業也〜情怒又斃色様暖鵠形野と蘇ハ記  
い〜〜貪夫の餌〜〜の美名にのみ〜〜時  
ハ患と〜〜〜流漸ハ改と念も〜〜〜法と〜〜  
飢粥廠と〜〜探〜〜〜下温〜〜ハ牛好〜〜  
〜〜〜渴凍と鉄〜〜〜禮と〜〜肩〜〜〜

考よるをよる〜〜〜た〜〜海〜〜〜て死す  
の程〜〜〜幸日百日と〜〜〜後と  
又誇りの中〜〜〜事〜〜〜は心  
と〜〜無苦の固而〜〜〜運あり〜〜年  
飢荒單々者流〜〜〜俄〜〜〜粥廠  
と考〜〜後の民よ〜〜〜救〜〜氷凍の音を救〜〜又  
荒政の一〜〜〜敵舎ハ水流の上〜〜水は金〜  
〜〜〜〜〜〜〜具〜〜〜  
業と採り願〜〜〜食〜〜〜  
と冷す〜〜

荒政要賢の六は施粥の法委〜〜〜



○ 白茅 俗所謂一はく本草綱目と考(エラ)一

茅針いほをるし万葉草花と書り

絲茅時珍曰其根甚長白軟如物而有節俗呼絲茅

和俗一はくといふ絲茅の情何歎か出といふと訓す

枝葉の意よりて一本の事といふ情さるるを

○ 葉栗 那 飛保村より二十町中 西を河田村まで大川の

わたりり 里の古墳川ありんとして大なる石を

掘りて 長九尺 幅六尺 田を以て打つる 旗の如き 洞の如き

なる 穴は 仰るる あり 徳宗の 破れたる とも あり あり

あり あり 文字の あり あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

一

梅よりいへば 葉栗は 人磨の 塚なり 一 河田

村より 葉栗の 光の 寺より 三所 乾の あり あり

飛保 河原の 市より 丑小 中葉 栗は 倉新 建

○ 嵯峨 清凉寺 若大 覺寺 御門 禪師 寺 秘前 糸本 願弥 如先

規 師門 禪師 式日 之 師 礼て 御 事 一 温 盤 會 大 念 佛 言 波 生

會 此 之 度 一 教 戒 八 先 祝 一 也 師 之 位 同 代 也 支 配 之 師 八

而 於 方 一 一 文 師 八 先 祝 一 也 師 之 位 同 代 也 支 配 之 師 八

而 於 方 一 一 文 師 八 先 祝 一 也 師 之 位 同 代 也 支 配 之 師 八

而 於 方 一 一 文 師 八 先 祝 一 也 師 之 位 同 代 也 支 配 之 師 八

而 於 方 一 一 文 師 八 先 祝 一 也 師 之 位 同 代 也 支 配 之 師 八







